

# 新明解 国語辞典

第 **四** 版

金田一京助

柴田 武  
山田 明雄  
◆主幹◆  
山田 忠雄

# 新明解 国語辞典

第 四 版

金田一京助

柴田 武

山田 明雄

山田 忠雄  
◆主幹◆

三省堂

1972年 1月24日 初版発行  
1974年 11月10日 第2版発行  
1981年 2月 1日 第3版発行  
1989年 11月10日 第4版発行



## 新明解国語辞典 第四版

一九九四年二月一日 第二二刷発行

編者 金田一京助 (きんだいちきょうすけ)

編者 柴田 武 (しばた たけし)

山田明雄 (やまだ あきお)

山田忠雄 (やまだ ただお) [主幹]

発行者 株式会社三省堂 代表者 守屋眞明

印刷者 三省堂印刷株式会社

発行者 株式会社三省堂

〒100 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集 (03) 3309411

販売 (03) 3309411

振替口座 001601卒高300

商標登録番号 三三五四四 / 実用新案登録番号 二二〇二七三

< 4版新明国・1,472 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-385-13098-1

〔本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。〕

## 辞書に求められるもの (第四版 序)

この辞書は、関係者一同の試行錯誤の結果 成ったものである。

朝起きて朝食の膳に新聞を見る、夜の帳(とばり)の下りる頃は夕刊を手にする。その度毎にわれわれは現代社会の進む方向と思潮を各自のアンテナで捉えようと試みる。媒体は言葉である。

本を読む、手紙を書く。事務を執る、連絡を受ける、命令を伝える。旧友と久し振りに会う、会話を楽しむ。テレビを見る。社会生活において欠くべからざるものは言葉である。

生活は言語によって支えられ、われわれの思考と内省は言語によって深まる。

同一言語による意志伝達が支障無く行われるのは、各自の灰白色の脳細胞内に 根幹を同じくする単語帳が存在するからであろう。その単語帳たるや、語釈は有ったり無かったりであるが、多かれ少かれ用例を伴う。書入れの精粗は、使用言語への内省の深淺を そのまま反映する。個人差は頗る大きい。

この単語帳こそ、いわゆる 語感 の背景となるものであり、また同時に、なり得るものでなければならぬが、自他の 語感 の衝突する時、普通 われわれは、その裁定を任意の辞書に委ねる。〔これは、委ねようとする、  
という意の一語法である〕しかしながら、辞書後進国の悲しさ、どの辞書を見ても満足を覚えることは めったに無い。そこに載せる用例は余りにも貧弱であり、当然の結果として語義の分析は十分でない。鋭さなど求むべくもない。語釈は十種一様であり、千篇一律である。付録の多さと本文の組み体裁に僅に自己主張をするのみ。

既に団栗(どんぐり)の背比べであって見れば、わが国においては、辞書の比較は無意義(ナンセンス)に近く、蒐集は多く好事(こうず)の域を出ない。複数使用の如きも、新聞における二―三紙併読(メルिट)に類する意義を積極的には持ち得ない。

上述の意味における個別単語帳を有する利用者が市販の辞書に期待して、それを引く最大の目的は、当該の語が、どういう場合に使われるか、という用法の確認でなければならぬ。十プラスの意味に用いるのか、一マイナスの意味に用いるのかは、最大の関心事である。また用法が二義以上に分かれる場合、いずれが主用であるか、本義と転義とは、どのようにかわるか。それが知りたいからこそ、わざわざ辞書を引くのである。

ところで、普遍妥当を志す辞書の記述も、編者の単語帳をたていとし、寓目例を緯よこいとして構築する限り、時に万全を保し難いことが有る。その短たんを矯める捷徑は、常用例への飽くなき注視と、異なる言語体験を持つ他者の批判への傾聴とでなければならぬ。幸い『新明解国語辞典』は発刊以来絶えず数多くの有益な意見により触発され発憤を繰返し、脱皮を重ねて来た。第三版において、語結合の型を示したのは、その顕著な例である。この度、第四版に当っては、最も脆弱であった、副詞、項目に大幅の補充を試みた。

副詞は由来、他の品詞と異なる職能を持ち、専ら文を直接構成する成分として文脈理会の上に重要な役割を果す。作例などでは到底その用法を蔽い尽くせない。生の用例に語らせる必要が有る。部分を省略すると、肝腎の用法が何処かに飛んでしまふ。勢い、引用は長目にならざるを得なかった。大いに努めた積りではあるが、猶、積尊の掌上で力りきむ孫悟空ではなかったか、という思いが切きりである。

今次の改訂に際しては、国語学関係者のみによる編輯の視野狭きを念おもひ、百尺竿頭、一步を進め、自然科学の専攻者中、関心の最も社会万般に向きたるを一人、選えらび起用し、能う限り多くの項目に就いて、発想の転換を心掛けた。その試みは未だ、点と線、の段階に止まるが、不日、大きな効を發揮するであろう。

一九八九年十月

主 幹

この辞典は、現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語に就いて、その多岐にわたる用法を種種の角度から内省・確認し、併せて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。

見出し語

- 一 採録方針 いわゆる自明合成語・擬音語は多く省略に従った。また、動詞とその名詞形との間に大きな用法の違いの無いものや、形容詞およびいわゆる形容動詞に基づく派生形（—さ—げ—が—）も、語釈の末尾に太字で示すのみにとどめ、別掲しなかった。
- 二 重要語 三千四百三十三に\*\*の印を付けた（一四二七ページ）。
- 三 字音語の造語成分（一七二七ページ）当該ページの上方一隅に枠で囲み別掲した。
- 四 固有名詞 国名はそのすべてを巻末に付載した。

語釈 単なる文字の説明および堂々めぐりを極力排し、文の形による語義の解明を大方針とした。

- 一 語義の分類 無意義な細分化を避け、大分類に従った。文脈に即しての意味は、用例の下のパラフレーズによって示した。
- 二 語義の配列 語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへとという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語原として冒頭に注した。
- 三 類義語の弁別 漢語的表現・古語的表現・老人語・雅語的表現・和語的表現・字音語的表現 などの術語のもとに同義語間の用法の相違を記述した。

右の術語中における∧漢語∨は、狭義における用法に属し、

字音語一般とは區別されるものを指す。

- 四 補足的説明 語釈に先立って、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などに就いての限定を知らせることに努めた。外来語のスペリングも語原扱いとした。原語の意味を注記したのもも少なくない、例、サイター(①(outer)を二酒) …

本義と異なる広義・狹義の用法および転義並びに必要な補足的説明を語釈の末尾に施した。

- 五 かぞえ方 実際の使用例から採集した物の算(ぞえ方)を、[かぞえ方]欄に示した。なお、「一個・一つ」という算え方については、少数に限って併記・単記して掲げた。因みに、この欄には「一山二箱……」など、広い意味の算え方ではあるが、厳密には助数詞とは言えないものをも注記した。

付録 巻末に、外国地名一覧・文法関係諸表のほか、アクセント一覧を付載して、利用の便を図った。

細則

見出しの表記と体裁

- 1 和語・字音語は ひらがなで表記した。
- 2 外来語はカタカナで表記した。ただし、慣用久しきに及ぶ約十語は準和語扱いとした。
- なお、1は「現代仮名遣い」(昭和六年七月一日内閣告示)に、2は「外来語の表記」(平成三年六月一八日内閣告示)に従うことを旨とした。
- 3 あいきど(合気道)・ねがわく(願わくは)等における右傍のカタカナ小字は、本行(本行)の1に対応する表音式表記である。
- 4 一見出しの区分は原則として二分とした。助詞「の・つ」を介するものは助詞までを上位に扱った。また、促音・撥音音が新たに添

加される口頭語形は、促音・撥音から以下を下位として扱い、本来の变化形と區別した、例、

そっけ〔素〕氣の意)

ふんまゝ〔踏んまゝ〕 (踏まゝの口頭語形)

そっけ〔俗〕氣〔踏ん張る〕

なお、区分は、現代の言語意識に即して行い、必ずしも語原にまではさかのぼらない。起原における区分は、語原欄に注した。

5 二字の漢字で表わされる見出しでも、動植物名・固有名詞および借字によるもの(仏教語の音訳や方言がなによる固名の表記を含む)は区分を設けなかったものが多い。

6 活用語は原則として終止形で掲げ、語幹と語尾に分けられるものは、その間に・を入れた。

#### 見出しの配列

7 五十音順による。同一のかなの中では、清音・濁音・半濁音、また促音・拗音<sup>①</sup>音<sup>②</sup>直音の順序に従った。

8 ーをもって表わす外来語の長音は、直前の母音がア・イ・ウ・エ・オのいずれであるかによって、それぞれの音を表わす かなに置きかえた位置に配列した。

9 同音語のオーダーは次の順位で配列した、

(1) 記号<sup>①</sup>造語成分<sup>②</sup>接辞(接頭語・接尾語) ↓ 単純語 ↓ 複合語(語の性質・構成)

(2) 助詞 ↓ 助動詞 ↓ 感動詞 ↓ 接続詞 ↓ 副詞 ↓ 連体詞 ↓ 用言(動詞・形容詞) ↓ 名詞(代名詞はその直前) [品詞の区分]

(3) カナ ↓ 漢字(表記)

(4) 外来語 ↓ 字音語(内部を上の漢字でそろえ、さらに画数順。同画数のものは、康熙字典の順。右に見えない字体は、同画の最初) ↓ 和語(語の種類)

(5) ハイシヤ 歯医者 ↓ 拝謝・配車・敗者  
カ・エル(代える・変える) ↓ カエ・ル(戻る・返る・響る)

のように、上位の音節数の少ないものから多いものへと配列した。[同一品詞に属する同音節数の語の区分]

10 共通の成分でくくられる同音語、および語原の異なる同形の外来語を便宜[ ]で統合し、スペースの節約を図った。

#### 子見出し

11 同根を統合する範囲は、外来語(梵語の音訳を除く)は四音節以上、字音語は複合語見出しに限り、また、和語は三音節以上に限る。

12 複合語や慣用語・ことわざの類における共通部分は―で略示した(活用語の場合は、語幹までを)。

13 非共通部分は かな見出しを用いず、ただちに正書法を示し、その下にアクセントを掲出した。アクセントの上の小書きひらがなは訓(み)を示し、直下のカタカナは歴史的仮名遣いを示す。

#### アクセントの指示

14 単語として独立の用法を持つすべての見出し語に就いてアクセントを示した。見出しの直下、○で囲んで示したアラビア数字がアクセント記号である(付録「アクセント表示について」)。

15 単独の見出しを掲げなかった語のアクセントは、言替えなどをしたその所において示すことを原則とした。

#### 歴史的仮名遣いの指示

16 アクセントに続けて、小字・カタカナで歴史的仮名遣いを示した。複合語の場合は区分に従って二行に割り、当該部分だけのカナを示して他は―で省記した、

例、あいだ① [間] あいち② <sup>③</sup> [長調]

#### 見出し語の正書法

17 [一]の中に、「常用漢字表」(昭和五六年一〇月一日内閣告示)に依拠しつつその語の「正書法」を示した(ただし、かな表記を普通とするもの場合は省略)。ここで言う「正書法」とは、漢字かな交じり文中

における漢字を主体とする表記の、最も標準的な書き表わし方として一般に行われるものを指す。

- 18 表記が二つ以上有る場合は、正書法欄に掲げないものを、**【表記欄】**に古来の慣用・もとの用字・代用字などの別を示しながら掲げた。  
ローマ字で書くことが普通であるものも、この欄に示した、

例、アイエルオー〔I・L・O〕

- 20 学習用の漢字は教科書体活字によって示し、常用漢字表外の字には直上に（を）付けた。二字以上に連続して同じ事を示す場合口は（）で包んで示した。

- 21 常用漢字表に有っても本表に無い訓みをする場合は、当該の文字の上に（を）付けた。

- 22 二字以上の漢字を常用するものの中、訓みに問題の有る語に就いて、  
(1) 熟字の各字が日本語の複合語の各成分と一対一対応を示さないものに就いては、当該部分を（一）で囲み、常用例は正書法欄に（a）、然らざる者は表記欄に（b）示した、

a あす〔明日〕……【表記】見付表

b きせる……【表記】普通「種管」と書く。

なお、bの外縁に「漢名は……」「漢風の表現は……」「……は義訓」と特に注記した「類（c）」がある。難読性の高いcは、今日表記一般として万人に求められるものではないが、広汎（はん）な読書のためには有用な知識と考え、この欄に閑説した。

- (2) 付表に掲げられている語でも、一対一対応をなすものと認められる語は、他の語と同じように、一字ごとと本書の一般原則を適用した上で、表記欄に付表にその語例が載っている旨を注記した、

でこぼこ【凸凹】……【表記】見付表「凸凹」

ともだち【友達】……【表記】見付表「友達」。「達」は借字。

### 品詞などの指示

〔18・20〕22の四項は第二刷において改めたものである。

- 23 〔一〕の直下に（かな表記のものは見出し、またはアクセントの直下に）、名詞以外の品詞名を（）に包んで示した。

- 24 品詞以外で（）を用いたものは次のごとくである、

（造語） 造語成分

（接頭） 接頭語 （接尾） 接尾語

（略） 略語

- 25 名詞・副詞のうち、本辞書では連語という術語は一切用いなかった。を併せ有するものは次のごとく扱った、

…… 名詞のほかにサ変動詞の用法

…… 名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法

…… 右のうち、一般には連体形の用法だけのもの

…… 名詞のほかに連体形に「たる」、連用形に「と」の用法

…… 右のうち、一般には連用形の用法だけのもの

…… 名詞のほかにダ活用形容動詞とサ変動詞の用法

…… 名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法

ただし、右の用法は雅馴（まこと）と認められるものに限る、網羅を宗とはしなかった。

- 26 動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、日本語の動詞の自他に就いては問題も多いので、サ変動詞のうち25に関するものは一切しるさなかった。補助動詞は「て」「で」を介するものだけに限り、他は（接尾語的に）などの注記の形で示した、

例、あう（自五）……【接尾語的に】……

- 27 助詞は、格助詞・副助詞・接統助詞・終助詞の四種に分けた。



位相などの指示

28 次の五種のほかは、「野球で」「すもうで」「仏教で」「数学で」「……方言」のごとく具体的に示した、

〔雅〕 雅語。日常のくだけた会話や文章には常用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に多く用いられるヤマトコトバ。

〔古〕 古語。漢文訓読系統の古風な文章語としてしか用いられないものや、江戸時代までは日常語として行われた字音語など。

〔口頭〕 口頭語。ごく普通の話し言葉。やや崩れた形を含む。

〔俗〕 俗語。話し言葉のうち、やや下品に傾くもの〔少数に、適用〕。

〔卑〕 卑語。公衆の面前では遠慮すべき表現〔極めて少数に適用〕。

### 語釈の表記

29 常用漢字をフルに使い、かつ独自の方針で表記を統一した、

例、(一) 哺乳類などをルビ無しで頻繁に用いた。

(二) 文中における動植物名は多くカタカナ書きにした。

(三) 外字および難読字には(一)内に、カタカナを用い(二)で訓みを示した。

30 用例の中、結合や用法などが局限されるものは、一一注記する代りに必要部分を太字で示した、

例、じまい「見ずー」 かまう「行っても構わない」

かつて「未だ」無かった経験

以上は、常に否定表現を伴うことを示す。

いる ①「見てー人・泣いてーのかあってーのか……」

右は、必ず「て」を伴って用いることを示す。

なお、直接引用については、原典のかなづかい及び用字に極力従うことを原則とし、難読の語には適宜 訓みを施した。

31 取り扱いに問題のある送り仮名に就いて、

史的に見れば、送りがなは、訓みの確認のため漢字の傍らに随時小書きしたもので、一貫した理法など由来 存しない。

然しながら、規範を生命とする辞書の場合、全くの無方針を避けるとすると、結局 常識の範囲内で多く送るもの〔a〕と、比較的少なく送るもの〔b〕との別が有ることを指摘した上で、そのうち、多く送る部分については(一)を以て示すことが親切であると考えた。

以下、「送り仮名の付け方」(昭和四八年六月一八日内閣告示。昭和五六年一〇月一日内閣告示により一部改正)との関連について示す。

(1) a が「送り仮名の付け方」の本則と一致するものは注記を施さない。

(2) b が本則と一致するものは、語釈の木尾にその旨注記する、

〔汚い〕……………表記「本表」汚い」 〔下める〕……………表記「本表」下る」

〔伴う〕……………表記「本表」伴う」 〔上れる〕……………表記「本表」上る」

(3) a が例外(本則には合わないが、慣用として行われていると認めて本則によらずこれによる、とするもの)と一致する場合は、その旨注記する、

〔幸い〕……………表記「例外」幸い、」 〔幸也〕……………表記「例外」幸せ」

(4) 複合の名詞のうち慣用として送り仮名を付けない、とされている語は、その趣旨を生かし b のみを示した、

〔合間〕〔並木〕〔巻紙〕〔字引〕〔乗組員〕

これに基づき、例えば「家並・町並・人並・十人並」などにも「並木」と同じ方法を適用した。

(5) 複合語の上位が かな書きの場合、下位の表記は多く a に従った。

(6) 常用漢字以外を使用する見出しに就いても上記を準用した。

付  
表

あす 明日  
あずき 小豆  
あま 海女  
いおう 硫黄  
いくじ 意気地  
いちげんこじ 一言居士  
いなか 田舎  
いぶき 息吹  
うなばら 海原  
うば 乳母  
うわき 浮気  
うわつく 浮つく  
えがお 笑顔  
おかあさん お母さん  
おじ 叔父  
おとうさん 伯父  
おとな 大人  
おとめ 乙女  
おば 叔母  
おまわりさん 伯母  
おみき お巡りさん  
おもや 母屋  
かぐら 母家  
かし 神楽  
河岸

かぜ 風邪  
かな 仮名  
かや 蚊帳  
かわせ 為替  
かわら 川原  
きのう 昨日  
きょう 今日  
くだもの 果物  
くろうと 玄人  
けさ 今朝  
けしき 景色  
こち 心地  
ことし 今年  
さおとめ 早乙女  
ざこ 雑魚  
さじき 棧敷  
さしつかえる 差し支える  
さつきばれ 五月晴れ  
さなえ 早苗  
さみだれ 五月雨  
しぐれ 時雨  
しない 竹刀  
しばふ 芝生  
しみず 清水  
しゃみせん 三味線  
じやり 砂利  
じゅうず 数珠  
じょうず 上手  
しらが 白髪

しろうと 素人  
しわす 師走  
（「しはす」とも言う。）  
すきや 数寄屋  
すもう 数奇屋  
ぞうり 相撲  
だし 草履  
たち 山車  
たちのく 太刀  
たなばた 立ち退く  
たび 七夕  
ちび 足袋  
稚児 稚児  
一日 一日  
築山 築山  
梅雨 梅雨  
凸凹 凸凹  
手伝う 手伝う  
伝馬船 伝馬船  
投網 投網  
十重二十重 十重二十重  
読経 読経  
とき とき  
とめだち ともだち  
なこうど 名残  
なごり 名残  
なだれ 雪崩  
にいさん 兄さん  
ねえさん 姉さん  
のら 野良

のりと 祝詞  
はかせ 博士  
はたち 二十歳  
はつか 二十日  
ほととぎす 波止場  
ひとり 一人  
ひより 日和  
ふたり 二人  
ふつか 吹雪  
ふぶき 吹雪  
へた 下手  
まいご 迷子  
まっか 部屋  
まっさお 部屋  
みやげ 土産  
むすこ 息子  
めがね 眼鏡  
もさ 猛者  
もみじ 紅葉  
もめん 木綿  
もより 最寄り  
やおちよう 八百長  
やまと 八百屋  
やまど 大和  
ゆかた 浴衣  
ゆくえ 行方  
よせ 寄席  
わこうど 若人

大和(大和絵等)

部首一覽																							
卩	卜	十	口	匕	勹	力	刀	凵	几	冫	冂	八	入	儿	人	亻	二	丨	乙	ノ	丶	丨	一
巳							可	八	八				入	儿	人	亻	二	丨	乙	ノ	丶	丨	一
三	三	三	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	九	九	九	九	九	九	九
巾	己	工	川	山	屯	尸	尤	宀	小	寸	宀	子	女	夕	夕	夕	土	土	口	夕	夕	夕	夕
六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	四	四	四	四	四	三	三	三	三	三
斤	斗	文	支	支	手	戶	戈	心	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	冫	
					(手)			(心)	左	右	走	走	走	走	走	走	走	走	走	走	走	走	
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	
老	示	玉	尤	犬	牛	牙	片	月	爻	父	爪	火	水	气	氏	毛	比	母	夕	止	欠	木	
老	示	玉	尤	(犬)	(牛)																		
元	六	四	五	四	四	四	四	四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
水	母	牙	立	穴	禾	示	石	矢	矛	目	皿	皮	白	艹	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	
水	母																						
三	三	四	七	七	七	七	六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	四	四	
行	血	虫	虍	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	艸	肉	耳	耒	耒	耒	耒	耒	耒	耒	耒	耒	
												(月)											
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	
金	長	舛	臣	里	采	西	邑	走	辰	辛	車	身	足	走	赤	貝	豕	豕	豕	豕	豕	豕	
	長																						
五	五	三	三	五	五	五	五	五	四	四	四	四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	
鬲	鬲	門	影	高	骨	馬	香	首	食	飛	風	頁	音	非	韋	革	面	食	非	青	雨	隹	
毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	毛	
龍	齒	齊	鼻	鼠	鼓	鼎	鼎	鼎	鼎	黑	黍	黃	黑	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃	黃		
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	

漢字索引 部首引

一、本辞典の見出しにおける漢字使用の語がすべてこの索引によって読めるように配慮した。すなわち、各字ごとに代表音訓(音は片仮名、訓は平仮名)を掲げ、必要に応じて熟語・熟字及び難読語の訓(△)のみを示した。  
二、常用漢字は「一」で、それ以外は( )で示した。(△は、常用漢字表にない音訓)  
三、本辞典不載の音訓・用例をも併せ掲げ、幅広い要求に応(△)えるように努めた(字音語・外来語は片仮名、和語は平仮名)。なお、一部新訓をも案出した。  
四、その字・語の「訓み」として慣行久しき者の中、もと他字の字音に属する向きは平仮名で表記した。  
五、配列は康熙字典の字順(部首順・画数順)を宗とした。右に当嵌(△)らぬ新字体は、最も妥当だと考えられる部首から引られるようにし、時には新部首をも設けた。

【一】部

一寸(いちゆん)

一日(いちじつ)

一昨日(いちけふ)

一向(いこう)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

一丁(いちてい)

丈夫(ちゆうぶ)

二進(にしん)

三進(さんしん)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三和土(さんわど)

三味線(さんまいせん)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

三鞭酒(さんべんしゆ)

【一】部

【二】部

【三】部

【四】部

【五】部

【六】部

【七】部

【八】部

【九】部

【十】部

【十一】部

【十二】部

【十三】部

【十四】部

【十五】部

【十六】部

【十七】部

【十八】部

【十九】部

【二十】部

【二十一】部

【二十二】部

【二十三】部

【二十四】部

【二十五】部

【二十六】部

【二十七】部

【二十八】部

【二十九】部

【三十】部

【三十一】部

【三十二】部

【三十三】部

【三十四】部

【三十五】部

【三十六】部

【三十七】部

【三十八】部

【三十九】部

【四十】部

【四十一】部

【四十二】部

【四十三】部

【四十四】部

【四十五】部

【四十六】部

【四十七】部

【四十八】部

【四十九】部

【五十】部

【五十一】部

【五十二】部

【五十三】部

【五十四】部

【五十五】部

【五十六】部

【五十七】部

【五十八】部

【五十九】部

【六十】部

【六十一】部

【六十二】部

【六十三】部

【六十四】部

【六十五】部

【六十六】部

【六十七】部

【六十八】部

【六十九】部

【七十】部

【七十一】部

【七十二】部

【七十三】部

【七十四】部

【七十五】部

【七十六】部

【七十七】部

【七十八】部

【七十九】部

【八十】部

【八十一】部

【八十二】部

【八十三】部

【八十四】部

【八十五】部

【八十六】部

【八十七】部

【八十八】部

【八十九】部

【九十】部

【九十一】部

【九十二】部

【九十三】部

【九十四】部

【九十五】部

【九十六】部

【九十七】部

【九十八】部

【九十九】部

【一百】部

【一百一】部

【一百二】部

【一百三】部

【一百四】部

【一百五】部

【一百六】部

【一百七】部

【一百八】部

【一百九】部

【一百一十】部

【一百一十一】部

【一百一十二】部

【一百一十三】部

【一百一十四】部

【一百一十五】部

【一百一十六】部

【一百一十七】部

【一百一十八】部

【一百一十九】部

【一百二十】部

【一百二十一】部

【一百二十二】部

【一百二十三】部

【一百二十四】部

【一百二十五】部

【一百二十六】部

【一百二十七】部

【一百二十八】部

【一百二十九】部

【一百三十】部

【一百三十一】部

2(人イ)

仲人(なこうど) 仲人なること  
 若人(わかひと) 若人なること  
 海人(うみびと) 海人なること  
 旅人(たびびと) 旅人なること  
 親仁(おやぢ) 親仁なること  
 海仁(うみじん) 海仁なること

2(仁) シン ニン  
 今宵(こんや) 今日のこと  
 今朝(けさ) 今日のこと  
 今際(いま) 今日のこと  
 今(いま) 今日のこと  
 今(いま) 今日のこと  
 今(いま) 今日のこと

介(かい) カイ  
 仍(じょう) ジョウ  
 仏(ぶつ) ブツ  
 仏堂(ぶつどう) 仏堂なること  
 和仏(わぶつ) 和仏なること  
 大仏(だいぶつ) 大仏なること

3  
 任(にん) ニン  
 任(にん) ニン  
 任(にん) ニン  
 任(にん) ニン  
 任(にん) ニン  
 任(にん) ニン

仙(せん) セン  
 付子(ついでこ) 付子なること  
 付子(ついでこ) 付子なること  
 付子(ついでこ) 付子なること  
 付子(ついでこ) 付子なること  
 付子(ついでこ) 付子なること

全(ぜん) オウジ  
 仞(じん) ジン  
 代(だい) カイ  
 令(レイ) レイ  
 令(レイ) レイ  
 令(レイ) レイ  
 令(レイ) レイ

4  
 仰(エイ) エイ  
 仰(エイ) エイ  
 仰(エイ) エイ  
 仰(エイ) エイ  
 仰(エイ) エイ  
 仰(エイ) エイ

任(にん) ニン  
 企(きん) キン  
 抗(かう) コウ  
 伊(い) イ  
 伊(い) イ  
 伊(い) イ

伍(ご) ゴ  
 伏(ふく) フク  
 伏(ふく) フク  
 伏(ふく) フク  
 伏(ふく) フク  
 伏(ふく) フク

5  
 伯(はく) ハク  
 伯父(はくふ) 伯父なること  
 伯父(はくふ) 伯父なること  
 伯父(はくふ) 伯父なること  
 伯父(はくふ) 伯父なること  
 伯父(はくふ) 伯父なること

伴(ばん) ハン  
 伴天(ばんてん) 伴天なること  
 伶人(レイジン) レイジン  
 伶人(レイジン) レイジン  
 伶人(レイジン) レイジン  
 伶人(レイジン) レイジン

似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ

位(い) イ  
 位(い) イ  
 位(い) イ  
 位(い) イ  
 位(い) イ  
 位(い) イ

佐(さ) サ  
 佐(さ) サ  
 佐(さ) サ  
 佐(さ) サ  
 佐(さ) サ  
 佐(さ) サ

余(よ) ヨ  
 余(よ) ヨ  
 余(よ) ヨ  
 余(よ) ヨ  
 余(よ) ヨ  
 余(よ) ヨ

6  
 伺(し) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ  
 似(に) シ

佳(か) カ  
 佳(か) カ  
 佳(か) カ  
 佳(か) カ  
 佳(か) カ  
 佳(か) カ

侍(し) シ  
 侍(し) シ  
 侍(し) シ  
 侍(し) シ  
 侍(し) シ  
 侍(し) シ

依(い) イ  
 依(い) イ  
 依(い) イ  
 依(い) イ  
 依(い) イ  
 依(い) イ

便(べん) ベン  
 便(べん) ベン  
 便(べん) ベン  
 便(べん) ベン  
 便(べん) ベン  
 便(べん) ベン

係(けい) ケイ  
 係(けい) ケイ  
 係(けい) ケイ  
 係(けい) ケイ  
 係(けい) ケイ  
 係(けい) ケイ

信(シン) シン  
 信(シン) シン  
 信(シン) シン  
 信(シン) シン  
 信(シン) シン  
 信(シン) シン

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

倚(い) イ  
 借(か) カ  
 借(か) カ  
 借(か) カ  
 借(か) カ  
 借(か) カ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ  
 俣(ま) マ

11  
 催(さい) サイ  
 催(さい) サイ  
 催(さい) サイ  
 催(さい) サイ  
 催(さい) サイ  
 催(さい) サイ

12  
 禽(イン) イン  
 禽(イン) イン  
 禽(イン) イン  
 禽(イン) イン  
 禽(イン) イン  
 禽(イン) イン

13  
 儼(エン) エン  
 儼(エン) エン  
 儼(エン) エン  
 儼(エン) エン  
 儼(エン) エン  
 儼(エン) エン

14  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ

15  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ  
 備(ビ) ビ









